

## 工夫された教員と学生の関係

ここ慶應義塾大学の湘南藤沢キャンパス(SFC)では、教員と学生間の「距離」が色々な意味において従来の大学に比べて大変小さいのが特徴的である。このことが教育や研究のあり方を一種独特のものにし、キャンパス全体の盛り上がる雰囲気を作っているように思う。

### オフィス・アワーの制度

教員と学生を近づけるための制度のひとつとして、SFCでは各教員がオフィス・アワーという時間を週二時間程度設けており、この時間には誰でもが、何に関してでも自由に教員の部屋を訪れて質問、相談、あるいは議論をすることが出来るという仕組みが確立している。日本の大学としては、こうした制度は比較的新しいかもしれないが、実は米国などではどの大学にでもある極く当たり前の制度に過ぎない。

かつて筆者も、SFC着任前に在籍した米国等いくつかの海外の大学においてはオフィス・アワーにはよく学生の訪問を受け、授業内容に関する質問や日本への留学に関する相談に乗ったものである。ことに米国の学生は、中間試験の採点答案を持参し、この時とばかり点数引き上げ交渉を物怖じもせずを持ちかけてくることも少なくなかった。

これに対し、SFCの学生はオフィス・アワーにおける振舞いがより穏健であり、また建設的にそれを利用している者が多い。学生が訪れるのは、授業関連の質問をもって来る場合が多いのは当然であるが、何かヒントが得られそうだと思えば履修授業の担当教員でない場合にも遠慮なく助言を求めにやって来る。

筆者の部屋には、例えば他の教員が担当する授業のレポート課題を取りまとめるに際して議論に乗ってほしいという学生が来るかと思えば、別の時には授業とは直接関係なく自発的にやった実証経済分析(例えば日韓貿易)を取りまとめたペーパーを携えてコメントを求めに学生が来るといった具合である(後者の学生は後日この論文をソウル大学との共同研究会で発表した)。また、時節になれば就職関係の相談のために色々な学生がやってくる。筆者の場合には、金融関係ないし国際的な仕事に関する相談をよく受ける。実は、SFCの学生は全員、教員の経歴や研究分野を詳細に掲載した「教員プロフィール」という冊子を持っているので、どの教員に相談にいくべきかが分かりやすいわけである。

また学生との接触は、ギブ・アンド・テイクの面も強い。コンピュータで何か新しいことをやろうとして困った場合にも、多くの学生が時間を惜しまずに教えてくれるのでたいへん有難い。SFCでは、学生と教員の間において双方向の関係がごく自然に成立しており、それが双方にとって勉学や生活の基本的パターンになっているといえる。

### 勉学の目標がカギ

学生にとっては、また科目履修についての自由度も高い。従来の大学では、四年間に学ぶべき科目の多くが順次配列され、学生はこうした標準的なプログラムを各学年でこなしていくというやり方が取られているのに対し、SFCでは学生が自分の関心に従って履修科目を自分で構成し個性的な勉強をして卒業する、というのが基本的な

考え方になっている。このため、勉学のスタンスが漫然としているような場合には、従来の大学とは違いSFCでは入学後も戸惑いが続くことになる。

しかし、勉強したいことがはっきりしている者、あるいは入学後それを自分で見つけだしてくる者にとっては、SFCは独特の科目履修システムや教員との接触システムを通じて個人が存分に伸びる仕組みとなっている。「求めよ、さらば（予想を越えたものが）あたえられる」。それがSFCだと思う。

(慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス・アドミッションズオフィス  
「SFCステージ」、一九九六年)